

ホーマンズの交換理論について

月光恵雲

On Homans' Social Exchange Theory

Eiun TSUKIMITSU

(1)

ホーマンズはハーバード大学に於いてL.J.ヘンダーソンの指導によってイタリアの経済学者パルトの著書「一般社会学」を読み始めたことが社会学を専攻する起因となった。

マートンの機能主義理論の論文を1949年に公刊に続いて1950年に人間集団 (Human Group) をホーマンズが公刊したのである。この著書は社会学の機能理論の発展と具体的事例分析を行ったことで有名である。機能的分析の明確な特質は社会学分析に社会体系の概念を利用することを第一としている。

総括的分析の第一条件は社会体系の明確な定義である。一定の社会体系を定めた時に、その構成要素を確認されねばならない。その構成要素の関係が問題となる。ズインメル以来の小集団の機能、構造、過程の理論についてホーマンズの「人間集団」は始めて貢献したのである。彼は要素として取り上げたのは次の通りである。

1. 活動, 小集団の成員としての活動 2. 相互作用, 集団成員相互の活動の関係 3. 感情, 一集団に関する集団成員の感情 4. 規範, 集団によって適用されている行為規範, これ等はパルトの分類に従っていることは注目されねばならない。集団はそれ等の要素の相互作用している複数の人と定義されねばならない。集団は集団要求と環境条件によって構成される。環境条件は社会的, 自然, 技術的条件に区分されることが出来る。社会体系と内部体系から成り立っている。その研究の対象の単位は前述の要素である。彼はまた次のように述べている。

1. 感情と活動 動機と関連活動は持続し, 連続的に再生される。一方の関係が変化した時に, 他方は影響される。例えば飢えの感情が鎮まったなら, 食堂に行き, 食事を注文しなくなるようなものである。
2. 活動と相互作用 活動の組織が変化したならば, 相互作用の組織も変化する。
3. 全体としては諸要素は相互作用のピラミット形を形成する。集団の活動の組織の中でどんな変化が起っても, 種々の位置の指導者と部下の相互作用の組織はピラミット形である。此の考えを発展した型は現代の工場の下部組織である。即ち工場での専門集団の仕事は全体として工場生産工程に於ける位置によって決定される。あらゆる集団の外部組織を工場の下部組織のように考える時にいくらかの危険がある。多部組織の考えは外部から押しつけられ, 綿密に組織

された制度にあてはまらない他の集団にまで拡げられる。工場の下部組織は外部的に要求された生産の一定水準を維持せねばならぬが、これと正反対の事は仕事もなく、街頭に群がっている青年の間に起らない。ホーマンズは外部組織を基礎として内部組織が現われることを主張している。外部組織は集団の行為を「集団は特定の環境の中でどのようにして生き残るか」の答としている。反対に内部組織は外部組織から生じ、それに反作用する集団行為を意味する。環境によって直接に条件づけられない組織を内面的と言ひ、外部組織の範疇に入らない形又は行為を含むからである。一社会体系としての集団の種々の要素の相互関係が内部組織を創り出す結果となる。特殊な社会体系の統合は次の基本変数の中に生ずる。

1. 相互作用と感情の相互依存 相互に時折相互作用する人は相互に好きになる。
2. 二者以上の間の相互作用の頻度が増加したならば、相互に好き合う度合は増加する。
3. 感情と活動の相互依存 相互作用の楽しさである。
4. 相互作用の生産物としての規格化、相互作用すればする程、相互の活動が類似してくる。

特殊な社会体系の統合は組織の中に新しい要素の出現で明らかになる。規範は一定の環境の下に行動するところのものに関して集団成員が考えている一理念である。規範は活動から現われ、活動にもどる集団の文化の重要な部分の一である集団成員の歴然とした行為よりむしろ規範的に類似した行為が多い。相互作用の特殊な生産物と規範的に統合された組織の形成との統合は内部組織の第一の明確な過程である。集団集団内の分化は第二の過程である。行動の基本要素から終局の結論をホーマンズは推論している。

1. 相互作用と感情の相互依存 相互作用の度合が多ければ多い程相互の友情が強くなりがちである。
2. 感情と活動 相互に友情を感じずる人は仕事後にその感情を表わす。
3. 活動と相互作用 相互作用する人は相互の活動は類似している。

此等は外部組織の上に統合された内部組織の出現を説明するために既に示された全すべての一般関係である。それ等は下部組織を分化するために働きつづけるとのホーマンズの見解である。更に内部組織の行為の多くは表現的即ち象徴的である。仲間の行為はその同一性を表現している。その仲間は社会序列に従っている。社会序列は仲間の間関係に基づいている。仲間と結びつけられない人にもそれを適用し、その人は仲間でない為に格下げされる。此の中に外部組織への内部組織の還元作用がある。電気回路の性質から採用されたフィードバックの概念をホーマンズは導入している。フィードバックと増強は連続的に続く、社会体系の中で明確な性質の一は外部組織への連続的増強過程を伴う内部組織のフィードバックであるとホーマンズは主張している。

情ある又は悪意の循環は全すべての有機体现象の特色である。内部組織のフィードバックは集団には好都合でもあり、不都合でもあると言うことは出来る。フィードバックは我々が判断の一定の基礎を持っていたならば、その働きや環境を多かれ少かれ有効ならしめる。この考えではホーマンズの機能主義理論は完全であり、彼の研究の残りのものはその応用である。ホーマンズの一電気設備会社の研究は更に重要な問題を示す。なんとなれば闘争の事例を示す、下部組織の中で外部

組織の衰退も強度の欠除もない。此の場合には一連の調停不可能の矛盾の増加が設計技師と監督との間に生じた、権威の明確な区分がなく、正反対の目的で二つの集団が団が働いた、その状況は対立的なものになり、一致して働く事の出来る等位構造がないので闘争が生ずる。指導者の役割がこのような決定的対等関係を与えることで必要な分析をホーマンズは忘れていた。ホーマンズの論文全般にわたって社会は体系的に組織されていると推論されている。これは小集団ばかりでなく大集団も同じである。それは同じ型のすべての組織であり、同一の法則がその中に適用される。すべての組織は下部組織即ち外部組織と内部組織を持っている。此の型は工場の下部集団である。そうしてそこに於ける特色はいくらか重要である。文明に適し、それを含んでいるすべての組織にまでその型の延長は工場の下部集団の型にならって社会空間を型どる企てを意味するこれは工場生産のようにボウリングの点数を取扱う時に判断の奇妙な歪曲となる。全論争の中に二重の明確でない主張を付着している。社会全体は工場の下部集団の如くに働くと言う多少わざとらしい推論を認めたとしても、その理論は基本的修正を受けるであろう。誰でも二つの組織を認めなくて、明確な一つの組織だけを認めがちである。事態が更に悪くなると、組織の種々の要素を分離する提案は明らかな進歩であるが、傾向、感情、活動、相互作用のような要素を用いる時にそれらを区別することは困難である。活動と相互作用は別々のものではない。活動は相互作用である。二重の同じ神秘的意味はここにある。活動と相互作用が同一物を述べる二種の方法であるとしたならば、それらの相互関係を述べる一組の原則はどんな意味があるであろうか。変数の間に行われている多くの推測された原則は根據もなく重複している。同時に理論は不明確な変数と存在しない組織に基づく範囲にまで形而学的に反論出来ない。けれどもこれらの欠点のために組織の性質やその要素の作用の型と性質を厳密に定義する時にその理論の厳密さの利益を否定するわけにゆかない。ホーマンズの研究は有意義な前進を示している。

(2)

ホーマンズは交換について述べる時に用語を定義した。その用語は記述用語と変数の二種類である。記述用語は行為の種類の名前であり、変数は量的に変化するところの行為の性質の名前である。即ち「一人の人に他人が与える活動が彼に価値があればある程、益々他人の活動によって返される活動を人は為す」との命題の中で「活動」は記述的用語であり、「価値があればあるほど」と「益々度々」は変数である。活動の頻度と価値は変数である。ホーマンズは「人間集団」の論文の中での記述用語は活動、感情、相互作用である。これは交換の中でも同じ事が言うことが出来る。動物行為の説明の中で述べられている活動の「頻度」は人間の交換理論では活動の量であり、有機体の状態変数は価値である。人間活動の量と価値のホーマンズの定義は次の如くである。

ホーマンズは鳩の行為の観察によって得たその行為の変数は鳩の活動の頻度である。頻度は活動の量の測定である。それは一定期間の活動の回数である。頻度は活動の単位を前提として計算される。鳩のつつくことを活動の単位として定義づける。人間交換に関する量の測定の中に此の

種のものである。経済学が商品の交換に於いて量の単位の換算単位を見出す事が出来る。人間交換の活動の多くは動的であり調査者は測定の方法を吟味する。E. Dチャプルの方法は最も厳密である。行為の量の測定は相互作用の頻度の測定即ち社会行為の頻度の測定と言い、選択的行為に重点を置く社会状況の中で全ての活動は社会的でないことは明らかな事実である。例えば一人の人が他人と助け合うことを認める代りに自分自身の仕事に没頭する活動がある。自分自身の仕事であるが、会社に執務して報酬として月給を得ると言う意味では社会活動である。社会活動と非社会活動との区別をすることは大変困難である。次に第二の変数は価値である。人はどのように単位を定められようとも一単位の活動を行う。この単位の活動は他の人から受ける一単位以上の活動によって、或は非人間的環境から受けるものによって補強され、又は罰せられる。人が受ける単位の価値は積極的又消極的である。それは人がその単位から受ける補強又は刑罰の程度である。受けた単位当りの価値として価値を定義せねばならぬ。なんとなれば受けた最初の単位の価値は次の単位のそれと必ずしも同一ではない。又は一単位の価値は一定期間で受けた単位の数で変化すると理解される。

「助けを受ければ受ける程、その後の助けの価値は少くなる」は助けの単位であると理解されるものと関係なく多分有効である。活動の単位を定義する方法が確実であることが便宜である。人は或る活動の価値を発見し、その活動は自分のものであると思ひ、他の人の個々の活動によって補強されたとする。人の活動は彼にとって価値ある報酬を与えるので彼にとって価値があると言うであろう。価値の我々の定義に一致するのは第二意味である。価値は種々の環境や相手から受取る何かである。価値の選択がどんなに幅広くとも、我々は直接に行為の頻度を観察し、計算することが出来る。然し単位当り人が得る補強度を如何にして測定するか、価値測定の一方法は価値の少い報酬より価値の多い報酬を得るために一定時間内人は多くの単位の活動をすると仮定する。此の仮説では特別の単位報酬によって補強されると前以て示された単位の数は報酬の価値測定である。初歩経済学は一度に使用価値と交換価値との区別して、後者だけが客観的に測定されると論じがちである。例えば一ポンドのコーヒーの価値はそれを飲むことから人が得る報酬によるのではなく、それを得るために人が支払う価格はたやすく決定されることが出来るが、コーヒーを飲むことから得られる報酬を測定する方法は明らかでない。それを基礎づける仮定は変数即ち価値の定義である。報酬の価値はそれを得るために行われる活動の総量である。全ての定義は重複を認める命題の選択は我々自身である。活動の価値と量との関係はXの命題はY形として変化する。報酬の価値が多ければ多い程人の活動は多くなる。価値の唯一の計量は実際の活動の量である。それだから命題は重複語となる。XとYは同計量である。それらは同じ変数である。重複語でなく、真の命題となるためにXとYは別々に測られねばならぬ。交換価値以外の価値の計量を見つけねばならぬ。経済学は同じ位置でそれを見つけだした多くの目的のために使用価値でなかったならば大変都合がよいが、全く捨てられない。従って効用は我々の価値と同じであり、限界効用である。それは単位活動当りの我々の価値と同じである。此の意味の同一性にかかわらず「価値」の用語を用い続けられるであろう。実際に人の行為を補強し、人にとって価値あるも

のは彼に都合がよいとの意味において有益であるとするが、必ずしもそうでない場合もある。価値測定には厳密なテストが行われている。然しながら価値測定は量の測定より未完成である。

価値に二要素があるとホームマンズは鳩の観察によって述べている。即ち鳩が穀粒を高く評価する時に二種類の事実がある。第一には穀粒が鳩の行為を増進する。一度にあざみと穀粒とを与えたなら、穀粒を食べる。第二には穀粒を与えなかったら、穀粒が好きであることがわかる。人の価値にも同じ種類のものがある。第二の種類の価値は我々の体系の一部である変数によって決定される。然し第一要素は同じ種類の変数ではない。それを定数として理解されている。又は数学者の言うように媒介変数として理解されている。例えば人が他人の援助を高く評価する時に、第一に援助は報酬でもある。すなわち価値であり、第二は人は近い過去に於いて援助なしに暮して来たことを意味する。第一の要素を評価する時に人が援助を欲するかを尋ねるには及ばない。過去の歴史が現在の状況に影響する時にはそれを見るだけである。或る量の熟練を必要とする仕事をするために雇われる時、人には確かに援助を必要であると言うであろう。仕事に熟練している人を好むより援助を高く評価するであろう。一人の人を得ることとその人以外の人を得ることとの間に選択出来る時、同じ状況の下にある他人より社会的承認に相対的に低い評価し、援助に高い評価をする。人の援助の欲求は彼の仲間の中に実質的に不変ではない。経験を増すにつれて援助をだんだん小さく評価するようになる。価値の第二の要素は相対的にゆるやかに変化するので、しばらくの間定数として見られる。即ち人にとって援助は価値があると言うことが出来る。全ての人に援助が価値があると言うことは出来ない。仕事の熟練を増すと自己の誇は援助を拒否するようになる。援助よりも誇の価値が大きいからである。人の行為を説明する時に常に援助を価値あると評価することは誤りである。フロイドは「人の過去の歴史は現在の行為の力強い決定要素である」と述べている。過去の活動に報ゆる或る種の行為を現在行っているばかりでなく、過去に於いて価値あると知った報酬は現在も価値あると認めている。時には過去の歴史は人を指導しているので、人の現在の価値を捉えるところの正しい機構はわかりにくい。人の現在の価値が現在の状態である理由を説明することは困難である。人は遺伝的過去から或る価値を継承する。人は人の父、母、地域社会の他の成員の手から得た報酬の同じこのみになりがちである。人は世代から世代へ同じ好みを伝承している。ある価値はある国の文化であり、或る報酬は他国よりも高く評価される。地域文化になればなる程一般知識は価値あるとは言い得ない。人の特殊な集団、特別な報酬は規範の遵守によって得られた報酬は重要となる。規範は集団の成員によって作られたものである。その成員は或る方法で行動せねばならぬ。規範を作る成員は彼等の実際行動が規範の中に述べられている理想的行為を遵守するところに報酬を得ることが知らされている。例えば生産規範である。工場に於いて一日又は一時間当りの仕事量は一定の規準に従わねばならぬ。金銭換算を含む価値は一般的に報酬と呼ばれ、規範はそれに適用される。異った産業集団は異った規範を遵守することに価値を見出すであろう。その価値は集成員の過去の歴史に基づいている。成員の価値はこの条件によってすべて決定されるわけではない。然もその価値は他人と共有している。然しながら人の特色ある経験によって決定される価値が個人の特色である限り価値の定義

をなすことは大へんに努力せねばならぬ。我々の価値の知識は常に不完全であろう。けれども研究分析は一定の実際問題であるので外観ほど困難ではないであろう。人は価値あるものを一度にすべてをなすことは出来ない。人は報酬があるとわかるすべての活動を彼の価値の大小の順位に並べる必要はないが、特別な場合には順位づける必要がある。我々は多くの人々の価値を比較する必要はないが、その中の二、三の価値を比較することが必要である。価値の絶対測定でなく、彼と私の価値の相対的測定である。価値の相対的測定である。価値は彼私の過去の歴史が同じである場合には類似性を多く含んでいる。それだから集団成員の察することが可能である。仮に価値が何であるかを定義することが出来なくても、類似性によって分析が可能となる。特に量の測定によって可能となる。

援助と報酬の価値を実現するために活動するが、その価値が現状のようであればならぬか説明出来ない。価値は何であるかを知る必要があるが、その理由を知る必要はない。

社会行為の変数の一は価値である。然し価値の測定に二つの要素がある。援助は過去に経験がない時には非常に価値が高い。第二の要素は短い期間内に変化する。かような変化は援助の量との相対的関係の説明が必要である。然し第一要素はゆるやかに変化しやすい。他の報酬と比較して援助を高く価値づけるのは人はその活動に未熟練との関係が明らかである。その熟練に時間がかかるので援助を必要とするが、その時間の間第一要素は定数として考えられる。然し第一要素を変化するものとして考え、停滞するものを定数として取り扱うのである。即ち価値は一時的には定数であるが、絶対的には定数ではない。人の活動の本質的相異はその価値の相異によって測定される。第一要素にもとづく価値によって測定される。即ち受取る側の人の価値の一時的定数である。その時の活動する人が第一要素か第二要素か、いずれの要素にもとづいて働くことによって人に与える単位活動が受取る人の価値を変化する。ある期間与える活動量を変化すると、多く与えればだんだんと単位当りの価値は変化する。与える活動の種類を変化すれば第一要素で働く。

要するに二つの主な変数は価値と量である。即ち受取る一単位の活動の価値と一定期間に受取られる活動の単位数、価値には二つの要素がある。一は一定期間内は定数であり、二は変数である。一人の人の活動は相手の活動の報酬又は刺戟となるとの見解が人間交換理論の中心をなし、人間行為の測定の方法として価値と量の相対関係の測定を意図した方法である。

(3)

約20年前、ホーマンズは社会相互作用の交換型は行動科学の中で三つの理論問題を解決するのに役立つことを主張した、(1)彼の提案した交換概念は実験室的研究と民俗学的実地研究との関係を示すのに役立つ。(2)基本的社会行為に関する一般的命題を明らかにすることを社会学者が可能となる。(3)集団行為の一般的命題から派生することを述べる方法を示している。行動科学にホーマンズの影響に関して種々の意見があるが、実際にはホーマンズの提案に実質的に注目されている。交換概念の使用、又は参照はホーマンズの期待した理論問題を解決していない。此の問題の

論争は交換概念を採用し、現代の行動科学の恒久的問題のいくらかを解決していないし、正確に的を得てもいない。

今日小集団の調査を進められているが、それ以外に三種の事をなされる必要がある。真の集団と呼ばれて社会学者がなしているものについて準人類学研究の結果と実験室の実験の結果の関係を示すことである。実験が実際生活を取り扱うものがあるとしても、実地調査と一致しない。然も体系的方法でもその一致を示されていない。ホームマンズは財貨の交換が人間の相互作用であるという命題を採用することに依ってまとめている。異った方法によって作られた資料の理論的關係を立証することの困難を過小評価し、新しい概念を求めることで理論的に調整されない。けれどもその関係を明らかにすることが重要である。これは行動科学としても重要である。実験と実地との間の相異は部分的に実験と非実験との計画の相異に等しい。その事は種々の問題を答えるために用いられる。観察と分析との間の区別は非実験的と実験的調査のそれと平行している。多くの区分のようにこれは無条件で正確ではない。実験はそれ自体説明ではない。実験は常に観察を含む。けれども実験計画は一般に統計的より寧ろ独立変数の物理的操作と従属変数の外部要素の支配とによって区別される。実験室の調査はベール人が集団の影響を感受している条件のいくらかを明らかにし、或る社会過程がどのように生成するかを示す。観察又は非実験計画は特別な出来事や特別の原因の働きについての叙述を立する為に典型的に用いられる。実験的計画は出来事の種類について普遍化を立証するために用いられる。社会学は行動機構図式の単なる叙述の記録であるので批判されている。適切な例は逸脱の領域から引き出される。社会学者は自殺者から小切手偽造者に至るまで、広範囲の逸脱行為に感心している。

それ故、彼等は事実上あらゆる逸脱の機構図式に対する個々の説明を公式化することを企てている。実験室実験は論理的、必然的に実地観察の後に行う人もあります。重要な変数が何であるかを調べ、決定されるように実地観察は始めに行われねばならぬ。次に実験室に入ることを主張される。実験は観察であり、実地の状況と同様に実験室に行われているものを調べることは容易であることが指摘されねばならぬ。けれども実験室の中における基本的経過、又は原則の観察は機構図式の観察と異っている。二人以上の人のボタン押しとピストンを引くこととの関連の社会交換を抽象することは可能である。それはマリノスキーのこぶねの間でいもとびんろう樹の実の交換と表現型的に無関係である。一般水準でボタンとピストンはマリノスキーが話すものの抽象を示すけれども、これは社会学者をしばしば悩ます抽象の種類である。その事は無意味な事実と意味ある事実とを混同するからである。

ラッセルは科学人は一般法則に到達する意味において意味のある事実を求めるが、かような事実は全く本質的関心を欠いていると言っている。一事実が科学的に意義あることは何か一般法則を立証すること、又は拒否することに役立つことである。実験主義の人は現代社会学者は実験に基礎を持っている基本的命題、即ち一般法則を立証するのに有意義な事実欠けていると主張している。実験室と実地との調査の関係は実験にもとづく発見物と妥当性の問題を含んでいる。実験室の中で発見された関係の普遍性を拡大することは理論の目的のための認識派生物を構成し、

応用科学に於ける行動工学の方法を發展することを含む。人が普遍性の拡大を望む関係や資料を選ぶことが前述の両者に優先している。社会学者が研究する行為の多くの特質は実験室実験に支配されることが出来ないと考えられている。スコットは次のように言っている。

社会成層の構造図式は実験調査で観察されないであろう。然し実験者はその構造図式でなくてその原則を求めているならば、実験室での行為はあらゆる表現型で自然の行為に類似する必要はない。然し実験室での実験過程と自然過程とは遺伝子型では同一であり、此の条件は注意深く形成された概念を必要とする。我々は研究するために家の財産の機能として家と家との間の夫婦の交換を選ぶであろう。我々は金銭報酬の機能として実験室の交換を選ぶ何らかの方法で我々は資源、成層、階級区分を研究すると、

実験の重要性や妥当性に関して今日の社会学の混乱は実験方法について社会学者の早まった区分と実際世界の理論的展望の不必要な展開とにもとづくのである。前者に関して社会学者は因果関係の実験のモデルを一般的に認めている。実験は殆んど不可能であると見られている。その代りに社会学者は実験の論理が非実験的調査からの因果関係の推論される統計技術で近似値を得ることが出来る種々の方法を求める。かような技術の力は受け入れられるが、応用して説明される変動の量は典型的に適切である。現代社会学の特色が一観察者に次の事を公言させている。

最小の科学は社会学、即ち社会行為の研究である。社会学が小さい理由の一は小さいもの以外に余り予言しないからであろうと。

此の事に関して若干の説明が示されている。(1)社会行為は余り複雑でない。(2)或る量の変動は理論的に説明されることが出来ない。(3)人は自由社会で高い予言性を期待してはいけない。(4)人間行為への重要な影響力は社会学者が研究するものでなく、又社会学の変数でもないので比較的に変動は殆んど明らかにされていない。現実の世界現象の社会学者の関心はベレルソンやスタイナーによって示された如く多くの統計的蓋然的命題を作り出している。社会科学の法則が統計的である理由は考案された状況より寧ろ実際の状況に適用できるかのように法則が述べられていることであるとナゲルは言っている。真の普遍法則は混入している要素の影響のために実際の状況に適用することを決して期待されることは出来ない。例えば物体落下の法則はあらゆる経験的状況に適用されるとしたならば、統計的限界内に述べられねばならぬであろう。然しそれは明らかに定義され、制限された条件の下にその法則は普遍的であると述べられている。ブラロックは次のように述べている。

実験室実験は真の实在の複雑さを研究することが出来ないと言う意味で人工的であるとの非難に社会学の中でたびたび出会うであろう。物理学者の実験も勿論人工的であり、真の状況に似ていない。これがその利点である。それらは正確な法則によって明らかにされた理想的条件に非常に近い近似値を相対的に提供している。物理学者はある意味に於いて非实在的である仮説を単純化することを知っているが、もしそれがなかったならば、物理学者は理論的に操作することが出来ない。物理学者は假定叙述と实在モデルを取り扱おうと。ブラロックや他の数量社会学者は単純化を必要としているが、実際問題に強い感受性が一義的に記述科学としての社会学の現在の位置

に反映している。結局非現実的状況の下に観察され、処理される実験のいくつかの種類に注目される。行動科学に対して非現実的環境の重要性をアシユ (Asih) は次の如く述べている。

社会環境と行動との関係を正確に予言する社会学は価値がある。それは又盲目的であろう。政治的、経済的規則は個人がそれらを作るために行動する限り持続する。此の明白な統計的規則の中で基本的に一定の時点での外部関係と事実の記録が見られる。記録を記入することは科学には必要であるが、それは原則に対する欠点を補充しない。社会学的画一性の研究が条件と結果との間の機能的関係を見出すことに失敗している。此等の中に少くとも個人、彼の傾向、能力集団関係がある。不幸にして実験室と実地との関係は社会交換の概念に訴えることによって解明されない。又他のいづれ概念によっても解明されない。寧ろ、その関係は認識論的に真実なものとして非現実的環境を見る世界の見方にたよるのである。行為の構造図式と原則は社会交換論と現代行動科学の実地と実験との研究に明確に分化される。ホーマンズは此の仕事は人と人との間の相互作用は財貨の交換であるとの見解を採用することによって進められることを提案したが、社会学の中で一般命題の欲求は非常に強いとホーマンズによって見られている。彼はそれについて述べることに相当の時間を費いやした。現代社会学理論は何でもを説明する長所を有しているように思われると彼は言った。ホーマンズの理論は説明である。殆んどすべての社会学者は説明することを理論の目的とし、一般命題は説明が論理的に続く演繹的三段論法を必要とするとのホーマンズの見解に賛成している。ホーマンズと社会学者との間の見解の不一致は此の一般命題の内容の問題である。ホーマンズの見解は制度の相互関係についてでもないし、社会の残存のための条件についてでもなく、人の人としての行為についてである。此等の命題は特に行動心理学の命題である。行動主義のホーマンズの紹介は自発的条件づけに似ず、広い承認を作り出す交換の概念に訴えることを意味する。社会的作用と非社会的作用との間隔は概念的にも、方法論的にも広い。それを交換概念で橋渡しするホーマンズの意図はいくらかの困難を伴った。ホーマンズは社会学の中で或る経験的普遍化がそれらから引き出される方法を示す五命題を公式化した。然しホーマンズが定義した如くにその命題は社会交換の理論を立証しなかった。始めの四命題は四十年以前に観察されたいくらかの経験的規則を述べている。第五番目の命題は1974年に改訂された「欲求不満と攻撃」の命題を194年に公刊されたドーラード氏外の人々による著書の「欲求不満と攻撃」の中で述べられていた。ホーマンズはなしたものと意図したものとを「人間集団」の中にまとめられた発見物についての命題を一般命題から引き出した方法を述べている。更にホーマンズのそれ以前の作品の中でまとめられた調査発見物もまた一般命題から引き出されたことを「人間集団」の中で示されている。

不幸にしてホーマンズの発見物は予言力の弱い調査を基礎としていた。ホーマンズは必要なものは、交換に関して注意深く集められ分析された資料であり、かような資料は「社会行為」の著書の中に入っていない。その後の交換理論は二種類に分けられる。即ち比喩的と形式数学的なものの二種類である。前者に関して相互作用の同意語として交換を用いることが好まれている。交換理論は制一性、相互引力、相互依存、統率力、規範出現、力の機動、地位の不一致、愛を説明す

ることを求められている。交換は到る処にある。第二の種類 of 交換理論は更に数式を含めて形式理論の構成を意味する。エマーソンだけは社会行為の行動科学的基礎を明らかに具体化した。ホームズや他の交換理論家とエマーソンを区別するものは特定の補強、刺戟の普辺化、補強計画に関する有効資料である。エマーソンの能動的反応原則は社会理論の帰納より構成に適している。エマーソンは能動的反応原則以外の何かを意味するものとして複雑な交換を見ているが、それらの原則は行為と行為結果の相互作用的性格にその焦点を置くことで交換理論の論理的出発点として用いられる。エマーソンの交換の図解はその存在論的位置についていくらかの困難な問題を抬頭している。これはスキナー (Skinner) の原則ばかりでなく、彼の科学哲学を具体化する社会学へのいくらかの重要な問題である。スキナーの反存在論的見解はよく理解されない。特に観察と説明の科学活動は観察説明されるものを行動有機体として見るのが科学者自身であるとの彼の関心はわからない。特にスキナーの多くの心理学の諸説は物の性質と言語構造との間の関係の性質とそれを知る過程の性質との両方について型にはまった概念に反映するという観察に敏感である。行動社会学は言語行為を支配する機能関係を見出さねばならぬ。交換概念は人間の社会行為の叙述に外部又は誤った性質を導入せねばならぬ。スキナーが鳩にピンポンをすることを教えることが出来たところの行動原則以外の行動原則に交換が関係せねばならぬ。交換に関するエマーソン自身の言語行為を調べることは有益である。エマーソンは行為が相互補強によって維持される関係を述べるのに交換を用いた。行動単位は二人以上の集団、又は集団の組織である。エマーソンは交換関係の間で個人に効用又補強を与えるために働く交換関係と個人が集団に対して効用と補強を与えるために働く交換関係を区別する。その区別は或る付加的性質が加えられる相互作用の或る形を分化するために行われるカ即ち分業、規範、地位、役割関係のような構造的性質が付加される。その形は個人の性質として述べられない。交換の第一の型は個人の行為が補強され、単純交換として指定される。それは好意を持ち、必要とあらば助け合うところ二人の友人の関係のような状況を意味する。エマーソンの交換の第二型は補強が個人又は集団の間に分配され、生産的交換として指定される。それは将棋、テニスをする二人の人で、共同活動の報酬を二人が見出すような状況を意味する。二人の人の場合には二人に行為者が相互に報酬結果を生ずるために相互作用する。三人の人の場合には二人の人のために生産された結果を第三者によって与えられる。生産的交換の導入は交換によって述べられる行動の偶発のものは協力又は競争によって述べられる偶発のものとのように異っているかの存在論的問題を抬頭した。例えば人がテニスボールの位置を交替させる交替させる交ニスを見るであろう。バレーをするために一人のプレイヤーはボールをサーブせねばならぬ。他のプレイヤーがそれを返さねばならぬ。他の返還はプレイヤーに他の人にボールを返す機会を与えることになる。テニスは交換だけであるか、テニスでは誰か一人は勝ち、他方が負けるのである。勝ったところのプレイヤーは他人の犠牲において補強される。此のプレイヤーは交換でなくて報酬を求めて競争しているのである。けれどもテニスのゲームは他の競争活動のように安定した関係、説明出来る関係である。テニスのプレイヤーの行為は得点によって必ずしも補強されないし、それだけで補強されない。エマーソンが述べるようにプロのプレイヤーの行為

は賞金によって補強される。見物人を喜ばせることでプレイヤーは共に補強される。プレイヤーと見物人とは共に共同補強のために必要である。交換は間接的である。もう一つはテニスの活動はいづれかの得点又は見物人に人気のあることによって補強されるのではなく、体育の健康成果によって補強されるのである。各プレイヤーの行為の補強は他の人の参加次第である。三状状況はすべて社会的であり、報酬の交換として見られる。此等の活動が補強される条件は各場合によって異っている。社会行為を分析する時に種々の条件が非常に重要である。交換よりむしろ偶発の自発概念は此等の条件の意義を明らかにする。偶発のものがあるとしたならばの叙述である。即ちある行為が生じたならば何か他の出来事はありそうである。此の出来事は報酬、刑罰、又は中立的出来事であろう。社会行為の中で関心の偶発性は個人の行為がもう一人の人の行為を求めて生ずる結果を明らかにする。報酬と刑罰とは共に実験室の中で、又は自然環境の中で明らかにされた行為次第である。例えば親が適切な行為次第で子供の社会的承認を与える。刑罰は好ましくない行為次第である。偶発性のものはもう一つの次元を含む。それらは時間と累積された反応によって組織される。又明確な数の累積反応とこれらの組合せ次第である。行為者は実験者でなくて他の人に補強と刑罰の結果を与える時にだけ非社会行為より社会行為は複雑である。特別の社会行為AはBの行為に影響を与えるため一定の方法で反応する時にA行為が現われる。社会的偶発性のものは個人が報いられるか、罰せられるか。頻度、確率、その結果の量を明らかにする。Bに対するAと同様にAに対するBの重要性を考えられねばならぬ。社会的偶発性のものは補強者が協力、又は競争を経て集団成員の間にどのように割り当てられるかを明らかにする。競争や協力が補強の偶発のものによって定義づけられる。それは一面に補強は非常に少ないこと。即ち一人の参加者によって補強を得ることは他の人のそれを得ることを妨げることを明らかにする。AとBは両方共補強されることは出来ない。他面では一人以上の参加者の行為はすべての成員の補強のために必要であることを保証する。此等の条件の中で社会交換は協力の特別の場合である。運動をするためにテニスコートで毎朝食前に会う二人の人は協力しているが、一人の人の行為は他人の行為を直接に補強する。その人の行為は前者を補強する。此の組み合わせは社会交換として述べられることが出来る相互補強の偶発のものを意味する。前述の解釈は集団の重要な行為特色に注目する。即ち社会的結果の組み合わせである。社会的偶発のもの分析は社会相互作用が補強偶発のもの詳細な説明の中でどのように複雑であるかを示している。社会学者によって示された一般命題は種々の偶発のもの条件と結果を明らかにせねばならぬ。その中の一偶発のものは交換である。社会的偶発物即ち協力、競争、交換は独立変数又は従属変数として調べられる。社会心理学は仕事の効力や集団成員の満足を求める協力や競争の結果にかなりの注目をしている。社会学的に基本的なものとして社会偶発物の結果が考えられる。かような結果の一は地位の分化である。エマーソンは協力の偶発の下にその出現を理論的に概観した。偶発物は従属変数として、研究されることは今までに少ない。けれども近年の研究は協力、競争、交換が発展する条件を明らかにし始めている。社会学者が或る規範が発展する条件を明らかにすることを企てる時に、従属変数として社会偶発物を研究している。社会学の一般命題のいくらかは社会偶発物とそれらの条件と

結果との間の機能的関係を述べている。社会行為を研究する中心的理由はその複雑さでなく、社会相互作用の中に現われる命題と法則を決定することである。社会出現問題は行動科学への特別なものでなく、社会学の中の交換概念の発展が此の問題への関心を復活している。ホーマンズは「社会学者は理論概念の誤りを犯しているばかりでなく、社会理論の中で心理学的命題による役割を認識する能力を持たないので悩んでいる」と言っている。ホーマンズが見るように心理学によって演ぜられた役割は普遍的行為についての命題の用意を意味する。此の一般的命題は社会の均衡についてでなく、人に行為についてである。社会学的説明は社会学的説明されるものが論理的に演繹される一般命題を求める。これはホーマンズの見解の中で社会学がそれらを紹介する説明の重要性を認めることが必要である理由である。エマーソンは社会学へのオペラント心理学の理論的補充を述べ、心理学的知識の確かな体系が既知の社会的出来事のためでなく、社会構造と構造変化の新しい原則が作られる基礎として用いられたならば社会構造の知識は更に拡大されると述べている。かような理論的構成は社会学内に現われ始めているが、それらが人々を連れもどす社会学傾向を確立していない。ホーマンズや彼の批評家による説の中で特に著しい。スコットが示したようにそれは行動主義的展望の不明確な、且不満足な長い歴史の一部である。ホーマンズの批評家は実験室で作られた法則の彼の好みを排斥した。且余りにも一般的なものとして一般命題を考える。更に彼は鳩の実験の中で発見され、社会学的説明に論理的に必要なものとして人間実験の中で模写されている一組の説明原則を考えた。第二の批評はホーマンズの一般命題は特別でない。彼はどんな刺戟、どんな活動、報酬のある出来事のどんな面が行為と結ばれるために選ぶか、異った集団の中で人々が異ったものを価値あると考える理由を明らかにすることを失敗したために彼は批判されている。ホーマンズは彼の命題は全てのもを説明出来ないことを知っていたが、社会機能主義者によってその点で批判された。

参 考 文 献

1. Gorge C. Homans ; The Human Group, 1950, New York, Harcourt Brace & World.
2. Robert L. Haublin ; Behavioral Theory in Sociology, 1977, New Jersey, Transaction Books
3. Gorge C. Homans ; Social Behavior, 1961, London Routledge & Kegan Paul.
4. Gorge C. Homans ; Sentiments and Activities, 1962, London, Routledge & Kegan Paul
5. Thibaut and Kelley ; The Social Psychology of Groups, 1959, New York, John Wiley & Sons.